ドラゴンクエスト……ですよね？

ブレイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンクエスト……ですよね？

【Ｎコード】
Ｎ１０１７ＢＡ

【作者名】
ブレイド

【あらすじ】
ある朝、目を覚ましたら目の前には某人気ゲームの代表的なモンスターである青いプルプルしているあいつがいた……でも此処何の作品なのかさっぱりわからん

0話　夢……ですよね？（前書き）

初めまして、私はブレイドと申します。
この度がにじファン様での初投稿となります。拙い文章ではありますが、どうか暖かい目で見守ってくだされば幸いです。
それでは――ようこそ、ファンタジー（ありえない世界）へ

0話　夢……ですよね？

夢――それは幻覚のようなものでまるであたかも現実のようにすら感じる時もある人間が眠りに就いている時に見るもの。
たしかレム睡眠とノンレム睡眠というものが関係しているとテレビで見たことがあるが、詳しくは思い出せない。だが今言えることは俺、鈴木（すずき）　信長（のぶなが）は今夢を見ているのだという自覚だけだ。

「ぴ、ぴぎぃ～！」

夢を夢と自覚するのは難しいだろうが、流石にこれは夢だとはっきりと言える。腕に伝わる感触や振動がやたらとリアルに感じるけど、夢とはあたかも現実のような幻覚なのだからこれもそうなのだろう。

「ぴぎぃぃぃぃぃぃ！！！！」

耳がキーンとするが、これも幻聴なのだろう。
最近の夢というのは本当に現実みたいだ、はっはっはっ。

「ぴぃ～……ぎぃぃぃぃぃぃぃ！」

ガブリ。腕に強烈な痛みが走るがこれも幻痛なのだろう。腕の皮が千切れそうな位痛いが直ぐに消えてなくなるだろう……。

……って、

「いったいわぁあああああああああ！！」

腕を思いっきり振って腕に噛みついた“生き物”を剥がそうと試みる。するとあっさり腕から離れた“生き物”は器用に着地すると俺の方を見上げてきた。

「ガルルルルル」

愛くるしいボディとは裏腹にいっちょ前に野生の生物独特の威圧感を放っている眼前の青くてプルプルしている生き物に俺は思わず後ずさりしてしまった。

「くっそ！　夢の癖になんだってんだよ！？」

噛まれた腕は今も赤く腫れておりちょっと血も滲んでいた。これは本当に夢なのか！？

夢だとしたら相当性質が悪いぞ！

「ガルルルルル」

「……やろうってのか？　言っとくが俺は中学まで剣道やってたんだぞ」

今は木刀すら持っていないので剣道をやってたなんて全く関係はない。ただ自分はそういう経験を持っているという自信を持ちたかった。そのための鼓舞的な意味を込めて言ったのだが目の前の“生き物”には全く効果はなかったようだ。というか耳ってあるのかこいつ？

「――はぁ、どうしてこうなった？」

目の前にいる夢の中の生き物……いや、もう夢とか言っていられない。これは現実だ。痛む腕も、あいつから感じる威圧感も夢なんかでは断じてないリアルの体感だ。

「なんで俺は“ドラクエのスライム”に襲われてんだよちくしょぉおおおおおおお！！！」

「ぴぎゃぁあああああああ！！」

高々に声を出すと同時にスライムが俺に襲いかかってくるのを見たのが、意識を失う前の最後の光景だった。

ちくしょう、夢であってくれよ……。

0話　夢……ですよね？（後書き）

この度は私の拙作を読んでいただき、誠にありがとうございます。０話、プロローグとなります話はいかがでしたでしょうか？　短いながらも楽しめたと思う方が一人でも居られたなら今後の励みと致します。

次回より物語を進行していきます。今後の展開の構想は練っているので、しばらくは安定した更新速度（週に３，４話位）を保てるとは思います。今後もその速度を保つよう頑張ります。

1話　ドラゴンクエスト……ですよね？（前書き）

ブレイドです。この話より物語が進行していきます。主人公のやきもきとした心情を上手く表現出来れば良いのですが……

1話　ドラゴンクエスト……ですよね？

「いってぇ……あんにゃろ至るとこ噛みついていきやがったな？」

スライムにボコボコにされてから暫くして、目が覚めた俺に訪れたのは体中に走る痛みの数々だった。

気を失う前は腕だけだったそれは今では足やら顔やら至るとことがジクジクとする。鏡なんかがあったらそれはそれは見事な歯型がついてるだろう。立ち上がることは出来たが、動く度に全身に痛みが走るのを感じて思わず顔をしかめてしまう。

いくらなんでも怒りすぎだ。いきなり力一杯抱きしめたのは悪かったけど此処までひどくはしてないぞ……。

「にしても……スライム、だったよな？　ドラゴンクエストの。――どうなってるんだよ？　俺は確か自分の部屋で寝てた筈だぞ」

それが目を覚ましたら目の前にスライムがいて、あのプルプルした目で俺を見ていたわけだ。びっくりして思わずスライムを抱きしめちゃったよ。なんで抱きしめたのかは俺にも分からないけど。

「本当に、夢じゃないんだよな？」

ポツリと零したつぶやきに答えてくれる者は誰もいない。それこそさっきのスライムでもいればマシだったのだが今は近くに何もいないのだ。鬱蒼と生えている木々の葉を風が揺らす音があっという間に俺のつぶやきを掻き消してしまい本当に俺は今1人ぼっちなの

だと思い知らされた。

「おい……おい誰かいないのか！　誰でもいい！　誰か、誰か返事をしてくれよ！！」

痛む体を無視して俺は森の中を走った。誰か人はいないか、どこかに家は建っていないか、藁にもすがる思いで木々の間を抜け、藪を抜け、獣道をずいずいと突き進んでいった。

しかし、家はおろか人っ子一人見当たらない。どこまで行っても辺りは森、森、森。景色すら変わらない様子に俺は近くの木の根に腰掛けた。

「だれか、だれでもいい。だれかいないのかよぉ……」

どんどん涙声になっていっても、誰も答える者はいない。俺はずっと一人なのか？　そう考えていると目の前の藪が突然ガサガサと音を立てはじめた。

バッと顔を上げ、誰か来たのか！　と希望を持った俺の目の前に現れたのは人ではない。青い体にプニプニボディを持つ生き物……さっき俺の全身を噛んでいった奴と同じスライムだった。

「なんなんだよ……何なんだよ！」

画面の向こうで見慣れたあの顔だが、今の俺にはスライムが俺を嘲笑っているようにしか見えない。遂に堪忍袋の緒が切れた俺は近くにあった木の枝を拾い上げヘラヘラとしているスライム目がけて大きく振りかぶった。

「ぶっ、飛べぇ！」

大きく横薙ぎに振った木の枝がスライム目がけて振るわれた。
しかしスライムはというと生意気にもジャンプして俺の横薙ぎを避けてみせた。……スライムの癖に！

「避けてんじゃ、ねぇ！」

「ぴぎぃ！？」

スライムが着地したのに合わせて蹴りを入れると今度はしっかりと命中し、足にサッカーボールを蹴ったような感触と共にスライムが宙を飛んだ。ざまぁみろ、と内心で零して少しだけすっきりした。

「ぴ、ぎぃぃぃぃ――」

しかし今度はスライムの方がその表情を歪めて俺を睨んできた。俺に蹴っ飛ばされたのが相当ムカついたらしい。だが、俺もまだまだやり足りないと思っていた所なのでスライムがやる気なのを見てむしろ好都合だとすら考えている。
ゆっくりと木の枝を構えてスライムと向かい合う。剣道の構えなんて二年振り位だが意外と体は覚えているものなんだな。

「……こいよ」

「ぴぎゃぁあああああ！」

「おっ、せぇ！」

飛びかかってくるスライムにタイミングを合わせて木の枝を振るう。するとさっきとは違いスライムに叩きつけるような形で木の枝が命中し、スライムは地面に派手に叩きつけることが出来た。これ

は蹴り飛ばした時以上の痛さだろうなと考えていると当のスライムはヨロヨロと立ち上がった。

「結構良い感じに入ったと思ったんだけどな。やっぱ木刀とかじゃないと駄目か」

「ぴぎぃ……」

しかしそれでもスライムは随分と弱っているようでずるずると這うような形で俺から逃げようとしている。普段の俺なら見逃しても良いかと思うのだが、今の俺にはそんな寛容な心は持ち合わせてはいない。大人しく往生しやがれということで、今度は木の枝を高々と振り上げる。剣道でいう上段の構えである。

「これでトドメを刺してやる――おら！」

瀕死のスライム目がけて上段から力一杯木の枝を振り下ろした。しかしスライムも必死なのか先程までのヨロヨロした様子から一転素早い動きで近くの藪の中に飛び込んだ。……逃げられたのだ。

「ああ！？　くそっ、逃げんなこら！」

とっさにスライムの飛び込んだ藪に近寄るも鬱蒼と生い茂っている藪の中で小さなスライムを追う事は不可能だ。

「ちっくしょぉー……スライムに逃げられるなん「あっはははははは！　おっかしー！！」て？」

いきなり真上から甲高い笑う声が聞こえてきた。まるで腹の底から笑っているかのようなその声。俺は咄嗟に顔を上に向け、目をぐ

るぐると動かして声の主を探す。すると――いた。近くの木の枝に座る一人の少女が。

やっと人に会えた。そんな喜びもつかの間で俺はすぐに少女の容姿に目を奪われた。目尻に涙を浮かべ、口元を手で隠す女の子らしい仕草に、ではない。日本ではまずお目にかかれない若草色の長い髪。少女の横顔に普通お目にかかることはないであろう長い耳。俺はその姿から少女が何なのか、知らず知らずの内に声に出してしまった。

「ドラクエの、エル、フ……？」

スライムだけなら兎も角、どうやらここは本当にドラゴンクエストの世界のようだ……。

1話　ドラゴンクエスト……ですよね？（後書き）

1話　ドラゴンクエスト……ですよね？　をお読みいただき誠にありがとうございます。

如何でしたでしょうか？　突然変な世界にやってきてしまった主人公の不安定な心情を頑張って表現しようとしてみました。実際に異世界にいきなり送られたら誰でも心が不安定になってしまうのではないでしょうかと思い、こういう表現といたしました。

さて、最後に登場した少女、彼女は一体何者なのか？　彼女の存在は信長にどんな影響を与えるのか

次回、「エルフ……ですよね？」　をお楽しみに！（次回予告って、要りますか？　個人的にはノリで入れているのですがw）

2話　エルフ……ですよね？（前書き）

主人公ノブナガが出会った少女。それは普通の人間にはまず存在しない長い耳……。

少女は一体何者なのか……（タイトルで丸分かりだって？　そんなの……普通じゃ考えられない……）

2話　エルフ……ですよね？

「ドラクエの、エル、フ……？」

「あっはははは！」

茫然としている俺を余所にドラゴンクエストに出てくるエルフらしき少女は笑い死んでしまうのではないかと心配になるほど笑っている。俺が気付いていることにすら気付いていないようだ。

「スライムに！　スライムに逃げられてるなんて！！　あっはははは！」

俺がスライムに逃げられたことが相当ツボに入ったらしくエルフらしき少女はとても高い声で笑い続けている。

俺は無言で少女が座っている木の枝が伸びる木の近くまで歩いていく。うん、これくらいなら大丈夫だろう。

「っていうか笑い過ぎだ耳長娘！」

昔カブトムシを取るときに木を蹴ってカブトムシを取っていた要領で少女のいる木目がけて思いっきり蹴っ飛ばす。助走をつけて蹴ったので威力は十分だ。

「うわわわっ！？」

案の定エルフらしき少女は揺れる木からバランスを崩して落ちそうにしている。その時にちょっと服の下から聖域が見えたりしたが人を笑った償いとしてもらおう。役得役得。

「――ふぅ、あっぶないなぁ」

「人を笑ったりするからだ耳長娘」

「ってうわ！？　君いつの間に近づいて来たの！？」

「お前が俺を笑いまくってる時にだよ」

もしかしてこのエルフ娘は所謂アホの子なのか？　二次元でのアホの子はまだ許せるが、実際にアホの子を目の当たりにすると呆れて物も言えなくなるな……。

「まぁ良いや。よっこいしょっと」

呆れている俺に気づいた様子もなくエルフ娘が木から飛び降りてきた。俺の身長の二倍以上の所から飛び降りたというのにあっさりと着地してみせた。

身長は俺より少し低く、年齢は俺とそれほど変わらないように見える。とはいえ俺もそこまで低い方じゃないので少女の身長は平均よりは高いかもしれない。

あどけない表情を浮かべる少女にリアルではコスプレ会場を除きお目にかかれないであろう長い耳が目に入る。なんとなく耳に手を伸ばしたくなったが流石に自重しろ、俺。

「ところで、さ。此処はそのぉ……何所なんだ？　地名とかでも良

い。教えてくれないか？」

せっかく話せそうな人を見つけたのは良いが、もし此処が本当にドラクエの世界でこの少女がエルフだとしたら正直心配だ。

ドラクエシリーズにおいてエルフは人間を恐れていたりとあまり良い感情を持ってない。ここで彼女に逃げられてしまっては俺はこの森で惨たらしく野垂れ死ぬことになる。慎重に、相手を怯えさせないよう注意が必要だ。

――しかし、

「変な恰好ね、貴方何所から来たの？　その傷スライムにやられたの？　ごめんね、笑っちゃって」

なんでこの娘こんなにテンションたっけーの？　怯えるどころかめっちゃ友好的なんですけど。

「その前に俺の質問に答えてくれない？　此処は何所なんだ？　町とか村とか、近くにないのか？」

「此処？　此処は【迷い人の森】冒険者も寄り付かない一度入ったら抜け出せないって言われてる森よ。確か……村位なら森を抜ければあったと思うけど」

「【迷い人の森】？　聞いたことないぞそんな名前の森なんて……」

少なくともドラクエシリーズにそんな名前の森は存在しない。此処はドラクエの世界じゃないのか？

「“私達”は昔からこの森に住んでるんだけどね。人間が入ってくるなんて珍しいから思わず見に来ちゃった。本当は駄目なんだけどね。君がスライムに苦戦してるのを見てるとおかしくって」

ああ、このエルフはまだ人間が何故怖いとされているのかよく分かっていない若いエルフなんだな……。じゃなければこんな風に友好的に接してこないだろう。
ある意味そのおかげで俺は九死に一生を得た訳だが……この娘いつか誘拐されるんじゃないか？

「とにかく、近くの村はどっちの方角か教えてくれないか？　案内は……別にいらないから」

チラリと少女の耳に視線を動かし、暗にエルフを人の多いところには連れて行かない。そういう意味を込めて方角だけと言ったのだ。
少女もそれは分かっているのかピシッととある方向を指さし、その方向に真っ直ぐ進めば村に出ると教えてくれた。アホの子と言ったことは訂正しよう。凄く良い娘だ。

「ありがとな、俺は鈴木　信長。縁があったら、また会えるかもな」

「スズキ？　ノブナガ？　変な名前ね。二つも名前があるの？」

変な名前と言われて少々カチンと来たがそれは表に出さない。結構気に入ってるんだぞ、信長って名前……。

「いや、信長が名前なんだが……ノブナガで良いぞ。周りにもそう呼ばせてるし」

「ノブナガ……ノブナガ……うん、覚えた。私はメアリー。メリーで良いよ？」

そんなやり取りをした後メアリー、いやメリーとは別れ俺は真っ

直ぐメリーに指さした方向へ進んでいく。途中またスライムとかに出会わないかヒヤヒヤしたものだが運よく何も出会わずに森を抜けることが出来た。
森を抜けた瞬間安堵からボロボロと泣いてしまったが体感で半日近くぶりに太陽の下に出れたのだ。限界だった。

「ああ、くそ、この年になってマジ泣きするとか思ってなかったぞ……」

服の袖で目尻を拭いメリーの言っていた村を探す。するとそれほど遠くない所に煙が上がっているのが見える。誰か人がいるのだ！
あれほど痛む体の傷がまるで嘘のように晴れ、その煙が上がる方向へと駆け出した。煙だけだったのが徐々に家が並ぶようになり、モンスター除けなのか、家畜を逃がさないようにしているのか周囲を囲む柵があり、そして人々が行き交う様子が伺える村の門へと辿り着いた……。

「は、はは……人だ。人が、沢山いる！」

その場に膝をついて喜びを噛みしめた。俺は助かったのだ、そんな喜びに浸っている俺を周囲の人々は怪しい者を見る目だったが俺は全く気にしない。

「と、とにかく誰かに此処が何処なのか聞かないと……」

とはいっても一体誰に聞こう？　周囲の人は俺が視線を向けると腫物みたいに顔を背けるし、声を掛けようとしたら露骨に立ち去られた……。
改めて自分の体を見まわしてみる。スライムに噛まれて歯型やら血が滲んでいる服装に加え、森の中を歩き回った時に付いた泥に汚

れた体……うん、悪い印象しかないな。

「せめてどっかで体洗っておけば良かった……水場なんてなかったけど」

後悔している俺を余所に遠巻きで村人達がガヤガヤを騒いでいる……俺を不審者と見ているのだろうか？　不味い。ここで村を追いだされたら今度こそ野垂れ死にだ。

「ちょ、俺は別に怪しい者じ「お前か？　報告にあった怪しい奴は！」だから怪しい者じゃないっての！」

村人達を掻き分けて一人の男がズンズンとこっちに近づいて来る。かなりがっしりした体付きだ。さっきのスライムの攻撃なんかでは全く怯みそうにないくらいに。

「お前さん、どっから来た？　こっちは村の裏門だぞ」

「えっと、ま、迷い人の森から……」

俺がそう言うと村人達は途端にどよめき始めた。何か俺変なこと言ったか？

「――この先には確かに迷い人の森っつー森がある。だがその森の名前は地元の奴しか知らねえしただの人間が出てくることは絶対に出来ない森だ。手前、どこでその名を聞いた！」

屈強な男が詰め寄ってくる。正直威圧感が尋常じゃない。直ぐにでもボコボコにされてしまいそうな状況に俺は森の中で少女から名前を聞いたと答えた。

「森の中に女の子だぁ？　おい、嘘じゃねぇだろうな？」
恐怖から、俺は首を縦に振るしかない。すると男は何を思ったのか俺の腕を掴みどこかへ連れて行こうとする
……まさか、このまま殺され！？
「は、放せ！　放せぇえええ！？」
「落ち着けよ、治療の出来る所に連れてくだけだよ」
「……へっ？」
呆然とする俺を連れて男はとある建物の扉を蹴っ飛ばすように開けた。
かなり大きな音がしたが、この扉全く壊れる様子がない。相当頑丈なんだろうか？
「親父！　ちょっくらこいつ看てやってくれ」
「毎回言わせるな！　ドアを蹴破るんじゃない！」
毎回って……豪快な男過ぎるだろう！？　ということはあれか？
毎回蹴破るこの男用にわざわざこの建物の扉は頑丈に作られてるってことか！？
この男もそうだが目の前の爺さんもまたかなり豪快な性格のようだ……。親父と呼んでいたが、まさか親子か？
「固いこと言うなって。ほれこいつだ」

「なんだこのガキは？　せめて泥位落としてから連れてこい」

ブツクサ言いながら爺さんが何やら皮袋を俺に投げてきた。中身を見れば数種類の草に小粒位の実がいくつか入り混じっている。これは……やくそうか？

「草は手で揉んで傷口に張り付けて、実は噛まずに飲み込め。そうすりゃ明日には治ってる」

どうやらゲームのように速攻で回復するわけではないらしいな……とりあえず言われた通りやってみる。

「っくぅぅぅぅぅぅ！？」

が、このやくそうもの凄く傷に染みた。涙目になりながら傷口に草を張り付けていく俺に男と爺さんは呆れた様子だ。

仕方ないだろう、マキ〇ンよりずっと染みるぞこれ……。

「んで？　このガキは一体何なんだ？　冒険者……にしては情けねぇ面してやがるが」

「さぁな？」

「おい、ふざけるな」

「本当に知らん。だが、迷い人の森でエルフに会ったらしい。だから連れてきた」

「このガキが？　何かの間違いだろう」

「――あの」

一通り傷口の手当を終えて二人に話しかけると同時に「「何だ？」」と答えてきた。やっぱり親子だろこいつら……。

「あの女の子のことなんだったら、多分エルフで合ってます。耳も長かったし」

……あの耳はやっぱりエルフしか持ってないよな？

「耳かよ……まぁ、それも一つの判断基準かもしれねぇがもうちょっと上手く説明してくれ」

「えっと、それじゃあ……」

俺はこれまでに起きたことを掻い摘んで説明していった。

気が付いたら森の中にいたこと、スライムに逃げられたことを笑う少女のこと、その少女に言われた方角に進んだらこの村にたどり着いたこと。

話し終えた頃になると男は無言で俺をジロジロと見上げり下げたり、まるで品定めするように観察し、やがて納得したように頷いて見せると俺の肩に手を置いた。

「……悪かったな、疑って。まさか“迷い人”だったとはなぁ」

「“迷い人”？」

「ああ、時折、どこからともなく迷い人の森に見知らぬ人間が入り込むことがある。その中でも極々稀に本当にどこから来たのかわからない奴もいてな、そいつらを俺らは“迷い人”って呼んでるんだ」

「“迷い人”は俺らとは違う。見た目は同じでも、在り方や考え方、体を包む雰囲気みたいなもんが俺らとは全然違う。だからエルフもお前さんに近寄ってきたんだろう」

男の言葉に続くように爺さんが喋りだす。

つまり、俺はこのドラクエの世界と違うところから迷い込んできた。ドラクエの住人じゃないからメリーも怯えていなかった。そういうことらしい。

しかもその“迷い人”の中でも俺は割と運が良い方らしく、村までの途中全くモンスターに逢わなかったのはあのメリーのおかげだろうとまで言われた。

メリー、あの少女は本当にエルフだったのか……本人には確認しないでいたが、こんな形で確証することになるとは思ってもみなかった……。

今度会った時に、改めて礼を言おう。また会えるかどうかなんて分からないが、俺はそう心に決めた。

2話　エルフ……ですよね？（後書き）

2話　エルフ……ですよね？　をお読みいただき誠にありがとうございます。

少女メリーはやっぱりエルフです。個人的にはドラクエシリーズのエルフは大好物なので絶対に外せない！　ということでキャスティング致しました。

そして現れる屈強な男と医者らしき爺さん……彼らもまた今後の物語における重要人物です。そんな彼らについては……また次回です！

次回、「退治屋……ですよね？」をお楽しみに！

3話　退治屋……ですよね？（前書き）

ヘタレな男ノブナガは“迷い人”と呼ばれるちょっと不思議な存在だった。しかし、この世界は一学生に過ぎない彼にとって生ぬるいものではない。ノブナガはこれからどうやって生き延びていくだろうか……

3話　退治屋……ですよね？

「うぉおおおおおおおおおおお！？」

「「「キィイイ！　キィイイイイイ！！」」」

「こっちくんなぁあああああ！？」

みんなこんにちは？　こんばんわ？　ノブナガだ！

今絶賛逃亡中！　何からだって？　後ろにいる悪魔達からだよ！

「「「キィイイイイイイ！！」」」

悪魔の名前は“ドラキー”　蝙蝠みたいなモンスターだ。

こいつらに挑むようになったのは昨日からだけど一回も勝ててない。というかこいつらむっちゃでけぇ！　俺の頭より二回りくらいでけぇ！

「無理無理無理むりぃいい！　こんなん勝てるかぁああ！？」

なんで俺がこんなバケモンから逃げてるかっていうと、それはあいつらに保護されたのが原因だ！　絶対！

ちくしょう……絶対選択ミスっただろ俺……。

「おい小僧。お前これからどうするんだ？」

白髪が目立つ爺さん、名前はランドさんと言うらしい。
ランドさんが突然話しかけて来たのだ。

「どうするって……」

ぶっちゃけなんでドラクエの世界に来たのかさっぱり分からない。
ネット小説とかである転生とかじゃなくて本当に突然この世界に来てしまった。
元の世界に帰れるなら帰りたいが……

「帰れるなら、帰りたいですよ……」

「なんだよ？　最初っから諦めてんのか？」

後ろから呆れたような声を掛けられる。
俺をこの建物に連れてきた屈強な男、アレスさんだ。やはりというかランドさんとアレスさんは親子だった。

「帰れる方法があるっていうんですか！？　あるなら教えてください！」

「……」

言葉を荒げ、肩を震わせながらアレスさんに詰め寄るとアレスさんは苦い表情を零す。それから無言で天井に顔を向け、黙り込んでしまった。

「……あるんですか？　ないんですか？」

「……あ～いや、ないっちゃな「あるぞ」おい親父！？」

言葉を濁すアレスさんに割り込むようにランドさんが肯定したのだ。

俺はすぐさまランドさんに詰め寄り、その帰れる方法を聞き出そうとした。

しかし、

「今のお前さんにゃ無理だ。なんてったって弱すぎる」

「教えてくれるだけで良いんです！」

「駄目だ。まずは強くなれ、話はそれからだ」

「強くなれったって……そんな直ぐには」

「アレスを貸してやる。おい、この小僧を鍛えろ。それがお前の次の仕事だ」

俺の肩越しにランドさんが言うと後ろでアレスさんがうなだれる声が聞こえた。　え？　何？　どゆこと？

「んな気はしてたけどやっぱりかよぉ……しゃぁない、おいお前名前は？」

「え！？　す、鈴木　信長」

「流石“迷い人”。変な名前だな」

「……ノブナガで良いです」

これから名前を聞かれた時はノブナガと言おう。いちいち変な名前って言われるのも癪に障る。

名前を言うや否やアレスさんに村の外に連れて行かれた。何をするのかと思ったら小さな籠みたいなのを取り出して、何やらゴソゴソとしている。

「これはあやかしそうっていう草を材料にした香だ。これに誘われてきたモンスターをこれからノブナガ、お前に倒してもらう」

あやかしそう……たしかドラクエ９で出てくる錬金材料だったな。モンスターを誘うなんていう効果はなかった筈だけど……。

しかもその誘ったモンスターを倒せって何言ってくれてんのこの人。

「いやいや、アレスさん。いきなり何言って「「ぴぎぃー」」――うっそぉ？」

「スライム二匹か……腕を見るにはとりあえず十分か。ほれ、練習用の木剣貸してやるからやってみ」

「いやほれとか言われても！？　俺スライム一匹でも怪しいでるから！！」

「そりゃお前素手と木の枝でだろ？」

「そりゃそうですけど！」

「とか言ってる内に来たぞー」

うぎゃぁあああああああ！？

こっちくんなぁあああああああ！？

「それが今では何故かドラキーに変わって数も三匹ってどうなってんのぉおおおお！」

「お、いたいた。おーい、追加な！」

「「「ぴぎぃいいいい！」」」

「ふざけんなぁあああああああああ！！」

結局その後ボコボコにされて、気が付いたらランドさんの医療施設の中だった。
戦果としてはスライム七匹にドラキー四匹という感じ。どれも殆ど一対一の状況に持ち込んでだけどな！

「半日かけてそんだけかよ……こりゃ気が遠くなるくらい時間かかりそうだなおい」

「でもこいつ剣筋は悪くなかったぞ。要はあれだ、度胸がねぇんだな」

「ほぉー、度胸ねぇ？」

ランドさんの顔がすっげぇ怖い笑顔だ。嫌な予感がビンビンする。体が満足に動けたら今すぐここから逃げ出したい。というか這ってでも抜け出してやる！！

「まぁ、逃げるなって取って食いやしねぇからよ」

しかしそんな俺の背中にのしかかってきやがった！　この人医者らしいのに怪我人になんてことを！？

「嫌だぁあああああ！　絶対に嫌だぁあああああああ！？」

体が痛いなんて言ってられない。背中にランドさんを乗せたままずるずると進んでいくといきなり頭が重くなって床の距離が零になった。

「まぁそう言うなって。おいアレス、確かゴーレム討伐の依頼が入ってたな？」

はっ！？　今なんつったこの人！

「おい、親父。流石にそれは……」

よし！　良いぞアレスさん！　実際に俺の実力を見てたアレスさんなら心配にもなるだろう！　そのまま反対意見を押し通すんだ！！

「死ぬかもしれないけど別に良いか？」

ってそっちの心配かよぉおおおおおお！

「死なれると面倒だな……何とかしろ」

あんたもそんな心配かよぉおおおおおおおお！

「ん～……まぁ、何とかするか」

「いぃぃいいいいいやぁぁあああああだぁぁあああああああああ！」

俺の魂からの拒絶は当然の如く無視された。

そして、夜が明けた！

「んじゃ依頼内容を確認すんぞ。依頼主はタナフ村。『村の炭鉱を掘っていたら眠っていたゴーレムを起こしてしまった。このままでは炭鉱業が行えないためゴーレムを倒してくれ』だとよ。眠ってるゴーレム起こすってどんだけ派手な採掘してやがったんだろうなぁ」

「知ったこっちゃない。ともかく依頼文書に依頼金を積まれた以上。

これは正式な契約だ。さっさと終わらせちまいなバカ息子」

「分かってるって」

なんか後ろでちゃくちゃく話が進んでいる中俺は簀巻きにされて転がっている。

もうどうにでもなれの精神で抵抗するのは諦めた。こいつら何が何でも俺を連れて行かせるみたいだし……

「問題は小僧だが……アレス、お前の装備ちょっと貸してやれ。古いのがいくつかあったろ」

「サイズが合わねぇだろ……いや、待てよ？　あれならいけるか……」

お？　なんか装備があるのか？　死なないようなら大抵の装備でも我慢できるぞ。

ただしステテコパンツは勘弁してほしい……あれは防具と認めない。

「旅人の服に皮の盾、皮の帽子か。いかにも初心者用って感じだな」

おい待て、待ってくれ。相手はゴーレムだろ？　なんでそんな防御力低い装備ばっかりなんだよ、せめて鉄の胸当てくらいにしてくれよ！

「絶対死ぬから！　せめてもうちょい頑丈なのないの！？」

「金属系の鎧は全部サイズ測って作られてんだよ。これで我慢しろ」

「なら皮の鎧とかは！？」

「お前迷い人なのに防具に詳しいな……だが皮系の鎧は全くない。あれ匂いきついんだよ」

「ちくしょぉおおおおおおお！」

結局俺は旅人の服に皮の盾、皮の帽子を装備させられた。

意外に旅人の服が頑丈に出来ているのに軽くて気に入ったのだがそれでもゴーレムのパワーの前にはただの布きれ同様だろう。絶対に一撃でももらうことは出来ない……。

それにしても武器は渡されてないのだがどうすれば良いのだろう？

「後は武器だが……今手頃なのがないんだ。悪いが武器はあの訓練用の木剣で我慢してくれ」

「岩の塊に木で挑めってか！？」

「――しゃあない、これでも持っとけ」

流石にそれは無理だと言うとアレスさんが自分の剣を俺に渡してきた。かなり重量があってちょっとよろけてしまったがかなり使い込まれていて独特の雰囲気がある。おそらくかなりの修羅場をこの剣で切り抜けてきたのだろう。

というか自分の剣を俺に渡してどうする気だ？

「落とすなよ？　大事な愛剣なんだからな」

「ん？　なんだ今回は素手で行くのか？」

「ああ。まぁ、ゴーレムくらいなら大丈夫だろ」

マジで！？　ゴーレム相手に素手ってこの人は化け物か！？

まさかアレスさんってバトルマスター的な職業！？

「んじゃ行くか。おいノブナガ、こっち来な」

剣を落とさない様におそるおそるアレスさんの横に行く。するとアレスさんが懐から羽のようなものを取り出し、空に投げた。あれはキメラの翼か。

「んじゃ親父、行ってくる」

それだけ言うと俺達は空高く舞い上がった。

結論から言わせてもらうとキメラの翼による移動は快適ではなかった。視点は安定しないし早すぎて酔いそうになるし……はっきり言ってもう使いたくないってのが感想だ。

タナフ村に着くや否や顔色が真っ青になった俺を置いてアレスさんが村の村長に依頼内容の確認に行く間俺は近くの石段に座り休ませてもらっている。

この世界に来てもう何度目になるか分からないが自分が情けなくて仕方がない。こんな調子で無事に元の世界に帰るなんて出来るのだろうか……。

「はぁ……」

「おいおい、溜息なんてついてるとツキまで逃げてくぞ？」

「……話は終わったんですか？」

「まぁな。依頼の確認だけだから早いもんだろ。そろそろ行くか？」

正直言ってまだ少し気分が悪い。だがこれ以上我が儘も言ってられないので俺は大丈夫とだけ言い立ち上がった。

村人の案内もあり炭鉱のある山までは特にモンスターに襲われることもなくスムーズに行くことが出来た。

炭鉱に近づくにつれて鼻の奥に花火をした時のような匂いが強くなってくる……。おそらく採掘に使う火薬の匂いなのだろうがかなり強烈な匂いだ。

「それじゃ俺はこの辺で……例のゴーレムは入口から真っ直ぐ進んだ先にいます。どうか、よろしくお願いします」

案内人も帰ったところで辺りを見渡せば荷車やスコップ、ピッケルなどの道具が散乱したままで放置されている。おそらくゴーレムが暴れた時に全部置いて逃げてきたのだろう。

「気をつけろよ？　かなり狭いところで戦うことになりそうだ」

危ないから後ろで見ていろと言わないのがアレスさんだ。今回の目的は俺に度胸を付けるためだから戦わせることは最初から決まっていたようなものだからなぁ……。

「帰りてぇ……」

「ゴーレムを倒したらな」

ニヤリと笑うアレスさんが非常に憎たらしく思えてきた。この人絶対楽しんでるだろ……。

ゆっくりと炭鉱の中を歩いていく。時折配置された蝋燭のおかげでなんとか視界は確保できているがそれでも暗い。足元に注意しながら進んでいくと急にアレスさんが話しかけてきた。

「今回みたいの仕事はな、本当ならもっと正式な依頼として“ギルド”を通して行われるんだ」

「――“ギルド”？」

なんだそれは？　聞いたことないぞ。

「俺たちみたいな冒険者が所属している組織だ。王都クルスに申請して許可が出たところが“ギルド”って呼ばれる」

俺もギルドに所属しているぞと言うアレスさんを余所に俺はある引っ掛かりを感じていた。

なんだ？　この違和感は……

「でもな、時折“ギルド”を通さないで依頼する輩もいる。“ギルド”を通すと金がかかるっていうのもあるが大抵は“王都にばれると困る”って輩が今回みたいに直接冒険者に依頼すんだ」

どんどん冷や汗を掻いてるのが分かる。まるで爆弾の導火線を間近で見ているような感覚だ。

「この村が何を採掘してたのかは知らねぇ。だが……」

グラッと地面が揺れ、重苦しい音が聞こえる……。まるで何かとても重い物を落としたかのような感じだ。ゴーレムだろうか？　にしては随分近いような……

「どうやら……目的とは違うもん掘り当てちまったらしい」

えっ？　と聞き返すより前にアレスさんに思いっきり突き飛ばされた。

ゴロゴロと転がされた後、痛む体を起こしながら何をするんだと文句を言おうとしたらアレスさんが大きな岩を相手に蹴りを喰らわせていた……あんなのさっきまであったか？

「ノブナガぁあああ！　下がってろ！　こいつは普通のゴーレムじゃねぇ！」

叫ぶアレスさんに岩が襲いかかる。あれは自然の落石とかなんかじゃない。明確な意思を持ってアレスさんを襲いかかっていた。

近くにかがり火があったのでそれを近づけてみると、アレスさんを襲っていた岩の形が見えてきた……あれは……

「い、岩でできた腕？」

岩の腕が前後左右に動きながらアレスさんを殴っている。なんだあれは？　あんなモンスター見たことないぞ！

「あ、アレスさん！？」

「慌てんな！　これぐらい、なっと！」

転がる腕を両手でつかむとグルグルとその場で回転し、壁に向かって投げつけた。勢いもあり、壁に叩きつけられた腕は見事に砕け散り、炭鉱の中は再び静かになる。

「な、なんですか今の……う、腕みたいに見えましたが」

「実際腕なんだろ。依頼にあったゴーレムとやらのな」

そんな馬鹿な……ゴーレムってのはもっと均一のとれた煉瓦みたいな体の筈……あんな岩の塊みたいもんでもないし、そもそも腕だけを切り離して戦えるなんて聞いたことがない。

本当にここに現れたのはゴーレムなのか？

「も、戻りましょう！　何が相手かわからないし、依頼内容と違うじゃないですか！」

「……」

俺の言葉にアレスさんが考える素振りをする。正体が分からないモンスターというのは実際にゲームでも対応なんて出来ない。それにこれはゲームじゃない。現実なのだ。命が危険にさらされているのだ。逃げた方が良いに決まってる！

だが、アレスさんはゆっくりと首を横に振った。

「いいかノブナガ。確かにこれは向こうが契約を違えたことだ。でもな、それでも俺は依頼を受けたんだよ。退治すると、言っちまったんだよ」

ポリポリと、頭を掻くその仕草に困った表情を浮かべるアレスさんを見て、この人は絶対に約束を破れないタイプの人間だと言う事が伺える。怖そうな外見とは裏腹に、実に誠実な人間らしい。

「まぁ、やれるだけやってみようや。ただ剣は返してくれ。流石に素手じゃきつい」

俺は急いで剣を外しアレスさんに手渡した。剣を受け取ったアレスさんはゆっくりと剣を鞘から抜く。

その瞬間ゾワリと鳥肌が立った。目の前にいるアレスさんから尋常じゃない威圧感を感じる。まるで別人……いや、鬼だ。

「悪いな、お前の度胸付けはまた今度だ。――ここからは」

俺の化け物退治の時間だ！

3話　退治屋……ですよね？（後書き）

3話　退治屋……ですよね？　をお読みいただき真にありがとうございます。

今回はノブナガが非常によわっちい一面を出していますが元々ノブナガはただの学生に過ぎないので戦闘とか出来ません。スライムやらドラキーを倒せてますがぶっちゃけかなり弱いです。

そんなノブナガに謎のモンスターの魔の手が伸びる（片方は今回砕けましたが）

次回、「人間……ですよね？」をお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1017ba/

ドラゴンクエスト……ですよね？

2012年1月4日03時54分発行